

General Englishの一考察

—Business English, Special Englishとの比較において—

橋本 光憲

はじめに

- 1 General Englishの位置付け
- 2 General Englishとは何か
- 3 General EnglishとBusiness English
- 4 Business EnglishとESP(Special English)
- 5 General English・まとめ

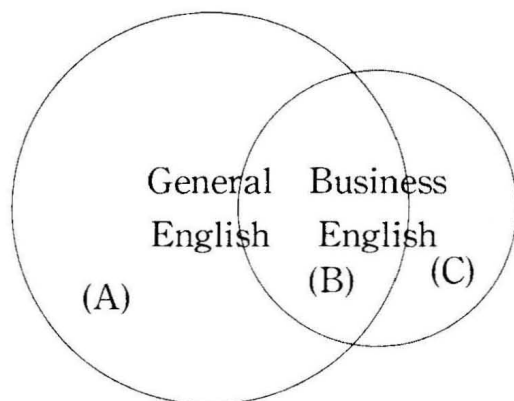
おわりに

はじめに

General English (GE) とは、一般英語であり、Business English (BE) とはビジネス英語・商業英語である。BEはGEの特化したものであるが、文法や構文はGEとは特に変わる所はない。BEは単語の使い方がや、特別になっている丈である。これが一般的な常識であろう¹⁾。

図を描くならば次のようになろう。

図1 GEとBEの相関図



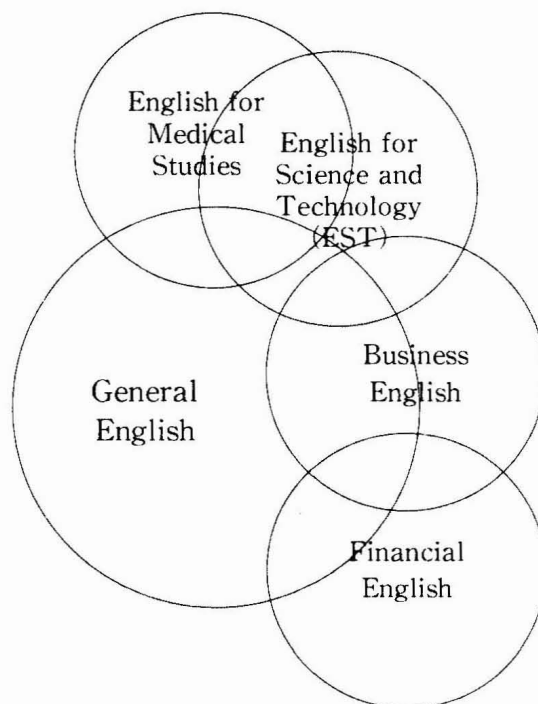
ここで示唆したいのは、GEとBEは共通する領域（境界域）…（B）が一般の想像に反して意外に広く（図ではBEの過半を占める）、BE特有の分野…（C）はかなり狭いのではないか、ということである。しかし、これはあくまでも“想定”である。

研究面から行くと、GEとBEの共通領域を研究することは、大学レベルにおける学生のGE能力（General English competence）をや、専門的なBE学習（Business English learning）への橋渡しをする要点を把握することであろう。

この点では、筆者は豫てから専門的テキストの要件の一つとして、「一般英語としての基本的な構文、表現、語彙を押さえているもの」と主張して来た²⁾。今後、自分自身の課題として取り組みたいテーマである。

一方、GEとBEが共通していないBEの独自領域（C）についてはどうだろうか。ここで1970年代半ばから盛んになった英語教授法の一つであるEnglish for Specific Purposes (ESP)―「特定の目的のための英語―専門英語」の視点を導入してみよう。ESP (Special English, SE) に関連しては筆者の別の論文(2)を参照) があるので、詳細は省略して、GE, BE, SE (BE以外も含めて)の相関図を描いてみよう。

図2 GE, BE, SE の相関図



[注] GEを囲む小円はSEの諸分野であり、この他幾つかの小円を描くことができる。

日本の商業英語学界では、「商業英語をESPの一分野として研究する」ことには異論がありそうである³⁾。日本商業英語学会はその英文呼称をThe Japan Business English Associationとしているにも拘らず、商業英語=Business Englishと位置付けることはできない状況にある。従って、この論文では、Business Englishを安易に商業英語と置き換えないこととする。

なお、日本の商業英語学は「ビジネス・コミュニケーション論」として位置付けられるような内容に変容していることが、秋山論文⁴⁾などから窺われる。日本の立場から言えば、「国際ビジネス・コミュニケーション論」ということにもなろう一だとするれば、早急な学会名称変更が望まれる処であるのだが。

BEの独自領域の研究としては、筆者は同じく2つの提言をしている(2)を参照。それは「ESPの中心的な分野としてのBusiness Englishの一般的知識を提示するもの」と「当該分野(例えばファイナンス)での一定レベルの専門用語を集約しているもの(glossary)」である。それぞれについて、筆者はテキストブックなり辞書なりの形で幾つかの貢献をしてきた積りであるが、それは後掲の注⁵⁾に譲ろう。

本稿の課題はこれまで述べて来た幾つかの仮説を例証することであるが、多くは未知の分野であり、果してどこまで成功するか分らないが、極力内外のデータを活用して問題の本質に迫ってみることとする。

1 General English (GE) の位置付け

(1) GE研究採り上げの背景

筆者は30年余、都市銀行に勤務して外国為替、融資等に携わって来たが、その間丸5年間、英文通信に従事したこともあって、Business EnglishとFinancial Englishに関心を持ち続けて来た。

また、大学での専攻が英語と国際関係であったので、英語一般について当初から並々ならぬ注意を拂って来た。これはGeneral English(一般英語)と言い換えてもよからう。

7年前、大学教員に転出して現在は銀行論、外国為替論、商業英語、国際コミュニケーション論等々を担当している。商業英語については、当初「貿易英語」と称していたものをカリキュラム改革で「商業英語」とし、更に新カリキュラムでは「国際ビジネス・コミュニケーション論」に名称変更をした。

この他、外国書購読では経営・ビジネス関係の分野別テキストを使用し、セミナーでは金融英語その他の分野別用語の研究を採り入れている。また、外部セ

ミナーなどでは実務英語、金融と証券の英語を指導している。

研究面では筆者の2つの専攻分野 (major) である金融と英語のうち、金融については銀行経営と内部管理、英語の方はBusiness EnglishとFinancial Englishを中心に論文発表、著述を行って来た。前者についてはここでは省略するが、後者については、最近、特にBusiness EnglishなりFinancial Englishの出発点であるGeneral Englishについて関心を深めるに至ったのである。

(2) 各方面でのGEの取り扱い方

GEの調査を始めて最初にビックリしたことは、内外の文献でGEに関連したものが殆どないことである。もちろん、筆者の狭い見聞の範囲内であるが、たとえば辞書の方から行くと、

Longman Dictionary of Contemporary English, Second Edition, 1987.

Collins COBUILD English Dictionary, New Edition, 1995.

松田徳一郎監修『リーダーズ英和辞典』研究社, 1984年

同上『リーダーズ・プラス』研究社, 1994年

などにGeneral Englishの見出しがないし小見出しはない。

それではと、専門辞書類を当たると、

大塚高信・中嶋文雄監修『新英語学辞典』研究社, 1982年。(Standard Englishの項あり)

安藤貞雄・樋口昌幸・鈴木誠一共編著『言語学・英語学小辞典』北星堂書店, 1990年。

にも一切記載はなく、『ロングマン応用言語学用語辞典』南雲堂, 1988年に、English for Special Purposes (English for Specific Purposes) の中で、「このような (= ESPの) コースは、一般的な言語能力を教えることを目的にしたコース (一般的な目的のための英語 English for General Purposes) と対比される。」との解説があるのみである。

この点については、同書原書の後身の*Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics* (1992)でも同一の記述が見られる。

では、一般英語の関係書ではどうだろう。現在、金融関連の調査研究で在外研究員として滞在しているThe University of Nottinghamの図書館で検索すると、最終的に*General English Syllabus Design* (1984)なる一書が出てくるのみである。

(この内容については後に述べる) 日本の英語学の案内書である長谷川瑞穂・脇山怜編著『英語総合研究—英語学への招待』研究社出版 (1992年)でも、索引か

らは何も出てこない。

次いで、Business Englishの専門書ではGEについてどのような言及をしているだろうか。筆者は英米の代表的なテキストとして次の2冊を調べた。

English for Business, Oxford, 1993

Business Communication : Theory and Application, Houston, 1993

しかし、両者の目次、インデックスを当った範囲ではGeneral Englishへの言及は見られなかった。

その他、手元にある限りのGE, BE研究書のインデックス等を当ったが、多少まとまった記述が見られたのは、Oxford Handbook for Language Teachersの1冊、*Teaching Business English*がBusiness English v. General English -a summaryを4ページに亘って提示しているだけであった。(この内容については、後で紹介する)

(3) ここでの一応の結論

前項での調査結果の特徴をまとめれば、

- ① General English サイドでは、GEの定義はむろんのこと、GE自体への言及が殆どないという驚くべき事実が判明した。Standard Englishという言葉はあるが、General Englishという言葉はないのではないか(後述のように事実はあるのであるが)という疑いすら抱かせる結果であった。

筆者は、この事実を、英米ではEnglish(英語)というものを「所与」(与えられていること・もの)と受け留めて、その存在自体を深く考えることをしないためではないかと想像する。日本の英語学界はもちろんその右並えである。

- ② Business English についても、同様な傾向が見受けられるようである。日本の商業英語学会でも、Business EnglishをGeneral Englishとの対比で見ると議論は、後で述べるように殆ど影を潜めている。

ただし、先に挙げた*Teaching Business English*は説明の通りGEを意識している本であるが、同書は“Business English must be seen in the overall context of English for Specific Purposes, ...”(P3)の前提に立った論考である。

- ③ General Englishに係る文献については後で検証する前提で詳しく触れなかったが、『ロングマン応用言語学用語辞典』での言及はESPについての記述の中であり、また*General English Syllabus Design* (1984)は、ESPが脚光を浴びせられ勝ちな中で、もう一度基本であるGE教育に工夫を加えようとしている本である。

- ④ 以上のように見てくると、General EnglishはESP (Special English)の鏡に写し出された像として、改めて認識されつつあることが看取されるのである。その一例として、日本の『現代英語教授法総覧』の中で、橋内による20. English for Specific Purposesの記述（下記）⁶⁾を見ることができる。

「ESPとは……（中略）」

この対極に位置するのがEGP (English for General Purposes) または一般英語 (GE, General English) であり、全人的な教育や教養の一部として英語を学ぶものであり、ごく一般的な英語の発音・文法・語彙の知識とその適用能力の習得を目指すものである。（アンダーラインは筆者）」

ESPでのGEの見方については後にまとめて述べることとし、次章では、主にGeneral Englishを肯定する文献を中心に「General Englishとは何か」という課題をBusiness Englishと対比しながら更に突込んでみよう。

3 General EnglishとBusiness English

(1) General Englishという言い方

ここまでGeneral Englishという用語の表現例をいろいろ見て来たので、「General Englishという表現はない」と主張する人はいないだろう。ただし、General Englishという言い方を余り見受けないことも事実である。

その代りと言えようか、Standard Englishという表現があり、関係著書も数点ある。(Blackwell書店目録による) 英国の小・中・高レベルのカリキュラム、*English in the National Curriculum*⁷⁾では、

※ To develop effective speaking and listening pupils should be taught to use the vocabulary and grammar of standard English. (p.2)

※ In order to participate confidently in public, cultural and working life, pupils need to be able to speak, write and read standard English fluently and accurately. (p.2)

としている。さらに、standard Englishについて次のように解説している。

※ Standard English is distinguished from other forms of English by its vocabulary, and by rules and conventions of grammar, spelling and pronunciation. (p.3)

この際、standard English ≡ General Englishという見方をすれば、上記はGEの定義にも通ずるものと言えよう。

ところで、General Englishという言い方を多用する場面はどこであろうか。筆

者の調査(1)を参照—では、外国人学生等向けの「海外英語研修」説明パンフレットの中である。そこでは、英米共に一致してGeneral Englishの教育を目標として謳っている。一例を挙げると、ノッチングム大学も会場の一つになっているLingualink Summer Schoolsでは、age 17 upwardsを対象にGeneral Englishというコースを開催している。

この他、事例としてはUniversity of Westminsterでも同様のコースが幾つか設けられているが、いずれもEFL Programme Administratorの下で行われており、外国人向けコースであることに変わりない。

また、高千穂安長「General Englishの教授法—ハーバード大学公開講座の一例—」⁸⁾は、“General English as a Second Language”を週8時間、12週間、合計96時間に亘って受講した、学生ではなく社会人としての体験を基にしたGEの教授法に関する実証的な論文であり、参考になる記録である。

(2) GE側のGEについての問題意識

先に、General Englishという言葉に冠した書物として、*General English Syllabus Design*(1984)を挙げた。

同書の編者、Christopher BrumfitはそのIntroductionの中で、

※ Throughout the 1970s, while language teaching theorists and practitioners excited themselves with course design for Specific Purpose language teaching, ...

※ The work of many teachers had either been ignored by syllabus and curriculum designers, or had been interfered with by insensitive and too rapid application of ideas from ESP theory ...

(アンダーラインはいずれも筆者)

とESPの盛行への反撥を示し、この本の主題であるGeneral English syllabus designのシンポジウムを、1983年トロントで開催のTESOL Conventionで採り上げるのに至った経緯を述べている。

このようにして、GE側自身でGEについての問題意識が高まったことが読み取れるが、その後のプロダクトの少なさから見て、GEがネイティブ、ノン・ネイティブを問わず最大の顧客を擁して自らの座に安住していることが窺われるのである。

(3) ESP側のGEについての問題意識

ESP (SE) は、いわばGEに対するアンチテーゼとして出発したものであるから、当初からGEを意識した発言が多い。その例を以下に示す。

① *ESP (English for Specific Purposes)*(1980)

同書末尾のESP and ELTの小項目で、We are reminded that ESP is a branch of ELT and perhaps not as different from it as might be supposed. (p.73)と注意を促している。

ELTはEnglish Language Teachingであり、その延長線上にEFL (English as a Foreign Language) を置き、その二つの枝分れとして下枝にGE (General English)を、上枝にESPを置く傾向がある。(後述のThe Tree of ELT参照) そこではEnglish as a Mother Tongue (EMT)とEnglish as a Second Language (EST) を別扱いにしている。

従って、General Englishは外国人向けの一般英語コースとなる。これがもし英米英語教育(彼らにとっては国語教育)界の常識とすれば、General Englishという言葉の使われ方の少なさも合点がいくのであるが…

しかし、アメリカのある辞書⁹⁾では、GEを“General English is the English used by literate (読み書きができる) persons in speech and writing.”と定義しているだけで、別に外国人向けというような区別はしていない。

また、前出のLongman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguisticsでは、English for Special Purposes (p.125)の定義の中で、English for General Purposesについて特別の限定をしていない。ただし、ESPについて特に説明がなかったが、Languages for special purposes (Languages for specific purposes), LSPの方を見ると“second or foreign languages used for particular and restricted types of communication ... (アンダーラインは筆者)と明確に示してあるのが気になる所である。

② *English for Specific Purposes-A learning-centred approach* (1987)

この本の中で前述のThe Tree of ELT (p.17)が紹介されている。しかし、言語学分野でよく見られるこの木の図について、しっかりした説明がないのがこの種の本の悪い所である。General Englishについては、前に述べたようにEFL (English as a Foreign Language)の太い幹になっているだけでなく、“GE is usually studied for exam purposes.”とあるが、これについても何の説明もない。

一方、本書を初めから丁寧に読んで行くと、第二次世界大戦後の流れとして、国際的規模でactivityが広がったこと、そしてtechnology and commerceが英語を学びたい環境を作り、EST (English for Science and Technology) に始まって、多くの国々でESPが発展した等々、縷々述べているだけで、外国人のための英語教育法だなどとは一言も言っていない。

ただ全体の文脈から見ると、non-native English users が需要者であり、英語を大きな産業とする英国が、従来ぬくぬくとしたELT (English language Teaching)の世界から、一部の人が新天地を求めて教育者として飛び出したことが読み取れる。そうならそうと素直に書けばいいのに、厄介な本である。

筆者の判断では、それはあくまでも元々の形であって、native English users にとってもGeneral English (英国ではStandard Englishと言うのかも知れないが)、ESPの学習は課題となっていると思うのである。

なお、同書(p.53)では、“What is the difference between ESP and General English? The answer to this very reasonable question is ‘in theory nothing, in practice a great deal’. ... What distinguishes ESP from General English is not the existence of a need as such but rather an awareness of the need.” と述べている。

③ *English for Science and Technology ; A discourse approach* (1985)

同書(p.6)では、

Although ‘General English’ is set off as quite separate from the other ‘kinds’ of English, it is, of course, the mainstay of all fields, whatever the purpose for which the language is used.

とした上で、次の表を示している。ESTの中に、経済紙、科学・技術記事などでGeneral Englishを使う部分があるという趣旨である。

English for Science and Technology

		<i>English for Occupational Purposes</i>
<i>English for Academic Purposes</i>		
<i>General English</i>	<i>EST fields</i>	<i>EST occupations</i>
	Engineering	Engineering technicians
	Forestry	Laboratory technicians
	Computer sciences	Mechanics
	Electronics	Electricians
	Mining	Plumbers
	Medicine	Computer operators
	Dietetics	Etc.
	Nursing	
	Etc.	

(4) Business Englishから見た General English

先に述べたように *Teaching Business English* は ESP の立場に立った BE の研究書である。BE の Syllabus (教授細目) に関して次のような前提を示しているのは、誠に興味深い。

People around the world conduct business meetings in English even though English may be a foreign language to all those present. The language that they use will be neither as rich in vocabulary and expressions, nor as culture-bound, as that used by native speakers, but will be based on a core of the most useful and basic structures and vocabulary. Businesspeople do not always need to know the full complexities of English grammar and idiom.

ここでは、同書が例示している General English と Business English の相違点を収録しておこう。(同書10~13ページ)

Table 1.1 : Business English v. General English-a summary

Pre-course preparation	Business English	General English
<i>Needs analysis</i>	To assess the needs of the company, the job, and the individuals, and to define the language level required by the job. In-company training departments must make decisions about the type of training required: group v. individual, on-site v. language school, person-to-person tuition v. distance learning, etc.	To assess the language needs of the learners.
<i>Assessment of level</i>	Using formal tests or interviews.	Placement tests or interviews to allocate learners to courses or to form groups of a similar language level.
<i>Syllabus</i>	Set courses will have fixed objectives and syllabus. Special courses will require a special syllabus. One-to-one courses may	Often determined by choice of coursebook and (if applicable) an end-of-course examination. The syllabus is

Pre-course preparation

Business English

develop syllabus and content on an ongoing basis.

General English

wide-ranging and may encompass the broad vocabulary and variety of styles found in literature and other general reading and in the world of entertainment and the media.

Course objectives

Defined precisely in relation to the needs analysis findings. May be worded in terms of the tasks/skills required in the job (job-experienced learners) or course of study (pre-experience learners). or in terms of required language improvement (e. g. command of structures or pronunciation).

Examination courses (e.g. Cambridge First Certificate) will have fixed pre-determined objectives. Individuals may have their own objectives: interest in the culture; desire to travel or live abroad; a feeling that language skills will be useful or will lead to better job prospects.

Time

In company language training, there are usually time constraints because of the need for training to be cost-effective. In colleges and universities, time for language study is also likely to be limited.

Outside the state education system, general language study will usually be open-ended. Even examinations can be repeated if necessary. An exception would be someone preparing for a holiday or residence abroad.

Learner expectations

Learners are likely to be more goal-orientated and to expect success. Business people normally have high expectations of efficiency, quality, and professionalism.

Learners also want to make progress but are less likely to set themselves specific targets within a rigid timescale.

Materials

Print, audio, and video materials can be bought off the shelf for Business English-but they may

In most parts of the world, there is now a wide choice of off-the-shelf materials for General English

Pre-course preparation

Business English

not meet the specific needs of an individual or group. It may be necessary to develop materials for a specific course.

General English

teaching at all levels. Materials development by the teacher is not usually required or expected.

Methodology

Many learning tasks and activities will be the same as on a General English course, especially for teaching structures, vocabulary, and social English. Role-plays are common to both although the situations and language will differ. Business English also borrows ideas from management training -e. g. problem-solving, decision-making, and team-building tasks. Job-experienced learners will be given many opportunities to present and discuss aspects of their work.

There may be a broader range of techniques in use in the General English classroom. Many activities are designed to make learning more 'fun', and variety for its own sake is important to maintain interest and motivation in the absence of specific needs

Evaluation of progress

In colleges and universities there may be set (written and oral) examinations. In company language training there is usually no examination, but the training organization may use an off-the-shelf Business English test. In informal assessment, the emphasis is usually on evaluating the success of communication -i. e. did the speaker/writer express the idea precisely enough and appropriately enough for the target situation?

Formal examinations include a written paper in which marks are awarded for grammatical accuracy as well as range of vocabulary and appropriacy. Oral examinations also take into account fluency, pronunciation and general communicative ability. Informal assessment (e. g. of class performance) is likely to focus mainly on grammatical accuracy, appropriacy of vocabulary and expression and pronunciation.

4 Business English と ESP (Special English)

この論文の中で、筆者はESPの視点を導入してGE, BE, SEの相関図(図2)を描いてみた。また、BEの独自分野の研究として、「ESPの中心的な分野としてのBusiness Englishの一般的知識の提示」と、「当該分野(例えばファイナンス)での一定レベルの専門用語の集約」を提案している。

また、本稿の中でも「ESP側のGEについての問題意識」を整理して紹介した。最近の論文「ビジネス用語の一考察」¹⁰⁾の中で一項(ESP面からの考察)を割いて詳しく論じたので、ここでは繰り返さない。

一方、自らの提案を実行して、幾つかの著書、論文、辞典等を発表している。〔本論文の注5—BEの独自領域の研究(橋本関連分)を参照〕

日本の場合、商業英語の研究は貿易英語あるいはビジネス英語として独自の発展を遂げてきたので、最近のESP研究に対してはかなりの抵抗が見受けられる¹¹⁾。(下記参照)

秋山武清教授は、「商業英語はESPの一分野として研究すべきであるという見解(橋本、1993)もあるが、商業英語学の立場からは異論もある」と述べておられるが、これにはやや誤解がありそうである。

ESP研究の提唱者の一人として、この名誉ある誤解は有難く受け留めなければならないかも知れない。しかし、「商業英語をESPの一分野として研究するという切り口は最近注目を浴びている(中邑光男氏)」この名誉は、同氏や日本における最初の唱導者である平田重行教授に属すべきものである。

また、同教授は、

日本の商業英語学会でもESPの視点による研究発表がみられ、個人的には興味はあるが、ESPと商業英語学の関係にはほとんど言及されることがないように思われる。ESPは英語教育、英語学、応用言語学等との関係が深いと思われるが、商業英語に関する通説とまでいわれている中村定義との学問的な関係は是非とも明らかにされるべきであろう。と批判している¹²⁾。

中村定義¹³⁾は、スイスの言語学者ソシュールを援用して、「商業英語学は商業英語現象に関する学である」とするものであるが、羽田三郎教授の諸理論を誘発したことはあったにしても、その他の見るべき発表があったとは思われない。

別の秋山論文(前掲注3)でも、「この画期的ともいべき中村定義が発表されたのが1960年のことであるから、30年以上も前のことである。それにもかかわら

ず、われわれの学会のどれだけ多くの人が中村定義を消化して商業英語学を前進させることができたであろうか」と自ら述べている通りであろう。

しかし、30年以上も前に自己完結的な定義が確立されているのであれば、「まず先達の業績を謙虚に検討して、その上で自分の経験や説を披露せよ」ということにやや無理はありはしないか。時代がどんどん変っているのに、このような対応は如何なものであろうか。

むしろ、中村定義を援用した商業英語の分析を数多く示すことこそ、今日にも生きる役に立つ理論として、後進を益するものと思われる。

ESP論自身は、実質1980年代に発展した新しい学問で、日々新しいものを採り入れている。「ESPが商業英語学の固有のアプローチ（商業と英語を一元的にとらえる立場）とでもいうべきものを踏えているとは思われない」と批判されるが、ESPは商業英語に限らない専門英語学であり、元々日本の独自の商業英語学に立脚したものではない。そこに根本的なすれ違いがあり、批判には答えようもない。

第一、日本の商業英語学のアプローチが英米の学界を説得し、独自の地歩を獲得しているというようなことはないのである。

この場合、筆者はむしろ則定隆男教授の統合化へのアプローチ¹⁴⁾を支持する。論旨の評価は省くが、同論文では“言語学的アプローチ”として、具体的コミュニケーション表現の分析（→ESP研究につながる）の研究を個別的研究の一つとして採り上げている。その当否は別として、筆者も学問の世界では“排除の論理”よりは受容的アプローチが好ましいと考えるものである。

以上で、図2についての裏付けは概ね出来たものと思う。

5 General English・まとめ

今までの議論の過程で、幾つかの新しい発見があった。それを図に示すと次のようになる。

図 3-1 EnglishとStandard Englishの関係

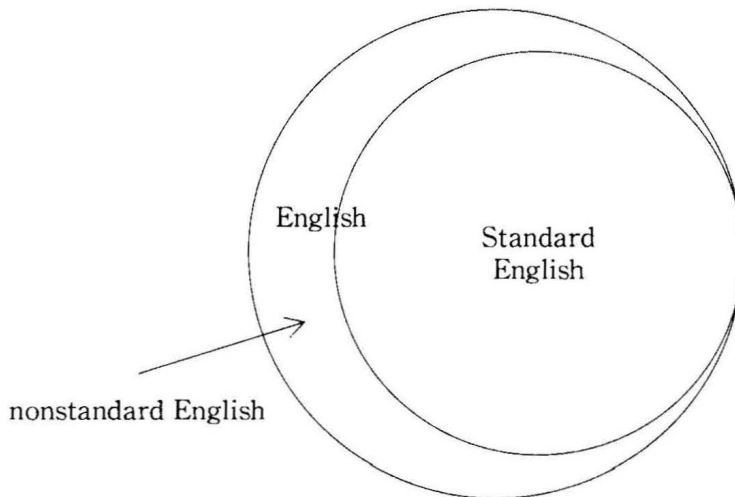
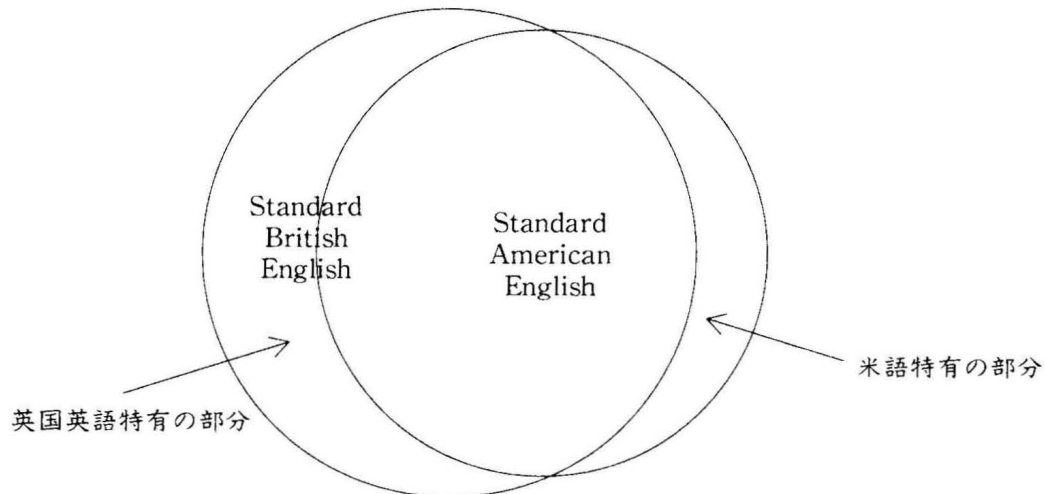


図 3-2 Standard British EnglishとStandard American Englishとの関係

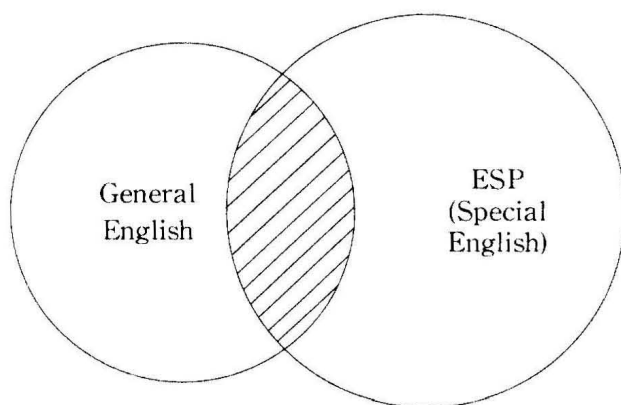


(注) 1. English には nonstandard English (= substandard English, 俗語、卑語、ain't, irregardless, don't gotなどの非標準用法等) を含む。(図 3-1)

2. Standard Englishは英米等の英語母国語の学校で教える英語で、一般教養人が使う。

Standard British EnglishやStandard American English等と分けることができ、それぞれの歴史、文化を背景に円の大小があり得る。特に発音の相違点が多い。(図3-2)

図4 General EnglishとESP (Special English) の関係



[注] 斜線の部分がGEとSEの境界域

- (注) 1. GEとSEの共通する部分は、それぞれのSEにおいてGEを使用する部分であり、その種類によって面積の大小があり得る。[参考文献(9) English for Science and Technology: a discourse approach 参照] いずれにせよ、GE抜きでSEの表現をすることは不可能である。
2. GEは英米で外国人向け教育(EFL)に使われる表現であるが、米国ではIntensive Englishコースといわれることが多く、GEという表現に英米の差があり得ることを窺せる。(注9参照)
3. SEの代表的な分野であるBusiness Englishについて、*Teaching Business English* [参考文献(5)]では、語彙、表現について、英語の文法や慣用を完璧に心得る必要はないと指摘している。(19ページ参照)

(I) 日本のGE研究

General Englishについては、まだまだ未解明の点が多い。日本ではどのような議論がなされて来たのだろうか。

1956年10月の日本商業英語学会の研究発表で、戸川年雄氏は「商業英語学方法論管見」¹⁵⁾で、「商業英語は、英語の特殊な一部面」である。これを対象とする商業英語学は、一般的な英語を対象とする「英語学」の一分科であり、広く言語

を対象とする「言語学」の一部門である。」といった趣旨のことを述べている。

事の当否は暫くおいて、「一般的な英語」に着目したことに注意したい。また、商業英語の「言語活動」については、「一般的な英語としての知識とその運用能力が基礎となる」としているが、議論は商業英語学の確立に向けての提義が中心で、一般的な英語についてこれ以上の追求がないのが残念である。

次に、1958年の研究発表では、宇都宮巖氏が、“Everyday English”と Business Englishを対比して論じているが、Everyday Englishを日常英語の意味で使っているだけに留まっている。また、中村巳喜人教授の『ビジネス・コミュニケーション論』の中でも、GEとBEの関係については多少の言及がある (p. 94~p. 97) 程度である。

その後、同学会ではこの種の議論は影をひそめている。やはり、Englishなし Business Englishを所与のものとして深く追求しない傾向があるのではなかろうか。

むしろ、最近のコーパス研究を背景とした長野格氏の必須語の研究、あるいはESP研究から来た中邑光男氏の概念・機能表現の研究の方が、General Englishとつながっているだけに今後の可能性を感じさせる。

他の分野では、橋内論文 (15ページ) のようにGEの一般英語としての位置付けを明確にしているものがある。また、金徳多恵子氏の論文¹⁷⁾では、「時代は、現代の要請によって、一般英語 (“General” English) の学習から特定の分野の英語、および、特定の目的を持った英語の学習が、コミュニケーションの道具として必要となってきた。」として、ESPのカテゴリーの中で“General” English for academic purposesにも言及している。

また、ESPの世界的動向に触れて

「ESPは、今や国際的に英語教育の重要な役割を担っている。特に、英語を母国語としない国においてその発達はめざましい。例えば、中国、アルジェリア、チリの大学で数多くのESP講座が開催されている。ESPプログラムの特徴として、対象となる学習者は子供よりは成人が多いが、エジプト、ドイツ、トルコでは中学生や高校生にESPのコースが開講されているといわれている。概して、米国、英国など英語圏においてはESPにはあまり盛んでなかったが、最近では移民の増加や英語圏以外からきた学生たちのために次第に教育体制がひかれてきている。」と述べている。

これらは、“General Englishは一般英語”と何となく理解して来た筆者の大誤解(?) に比べれば、大変な進歩である。

ただ、全体を見れば、研究社の『英語年鑑'96』で、個人業績一覧を当たってみても、GEを扱っている人は皆無であり、基礎英語的な General English は研究者にとっては、余り意欲の湧かない分野なのかも知れない。

むしろ、BE側はBE教育・研究の面でその前段となるGEは興味ある研究分野であると思う。多数の方々の参入を期待したい。

(2) 英米の GE 観の相違

すでに述べた通り、筆者はGEに対する見方について、英米間で何等かの相違点があるのではないかとの疑問を懐いたので、二、三の調査を行った。

最初に起った疑問は、なぜ General English について具体的な定義が見当たらないのかということである。これを筆者が在外研究で滞在中のノッティンガム大学の Hilary Bool, Director, Centre for English Language Education (CELE) にぶつけてみた。

彼女はセンター所長であり、BA, Diploma-TEFL (Teaching of English as a Foreign Language), Diploma-TESP (Teaching of English for Specific Purposes)の保持者で Academic English の専門家である。

「General English とは何ぞや」という質問に対する返事は、“The term ‘General English’ is used in Great Britain only to mean certain fundamental portion of the English language to be learned by foreigners in English as a Second or Foreign Language education.”といった趣旨であった。

次に、“I failed to find any books on General English, any definitions of the term, or any meaningful references to it. Why?”

と質問すると、“Because it is taken for granted.”と答えが返ってきた。英国の学会は随分なまけ者で不親切だなとあきれたが仕方がない。

この内容を、筆者の米国での修士課程で教った Dr. Leon F. Kenman, Department of Modern Languages, Thunderbird - American Graduate School of International Management, Glendale, Arizona に、次の資料を併せて送り、意見を求めた。

Although ‘General English’ is set off as quite separate from the other ‘kinds’ of English (English for Science and Technology, English for Academic Purposes, English for Occupational Purposes), it is, of course, the mainstay of all fields, whatever the purpose for which the language is used.

(Louis Trimble, *English for Science and Technology: A discourse approach*, Cambridge University Press, 1985, p. 6) (本論文18ページ参照)

An American book mentions that “General English is the English used by literate persons in speech and writing. It is the prevailing language of business letters and reports; advertising; newspapers and magazines; fiction and nonfiction; radio and television.

(J. Harold Janis, *Modern Business Language & Usage in Dictionary Form*, Doubleday, 1984.) (本論文32ページ注9参照)

Paulin Robinson, *ESP Today: A Practitioner's Guide*, Prentice Hall, 1991, p.4 quotes the following figure as the situation of ESP in the USA, mentioning General EAP (English for Academic Purposes) under Academic ESP.

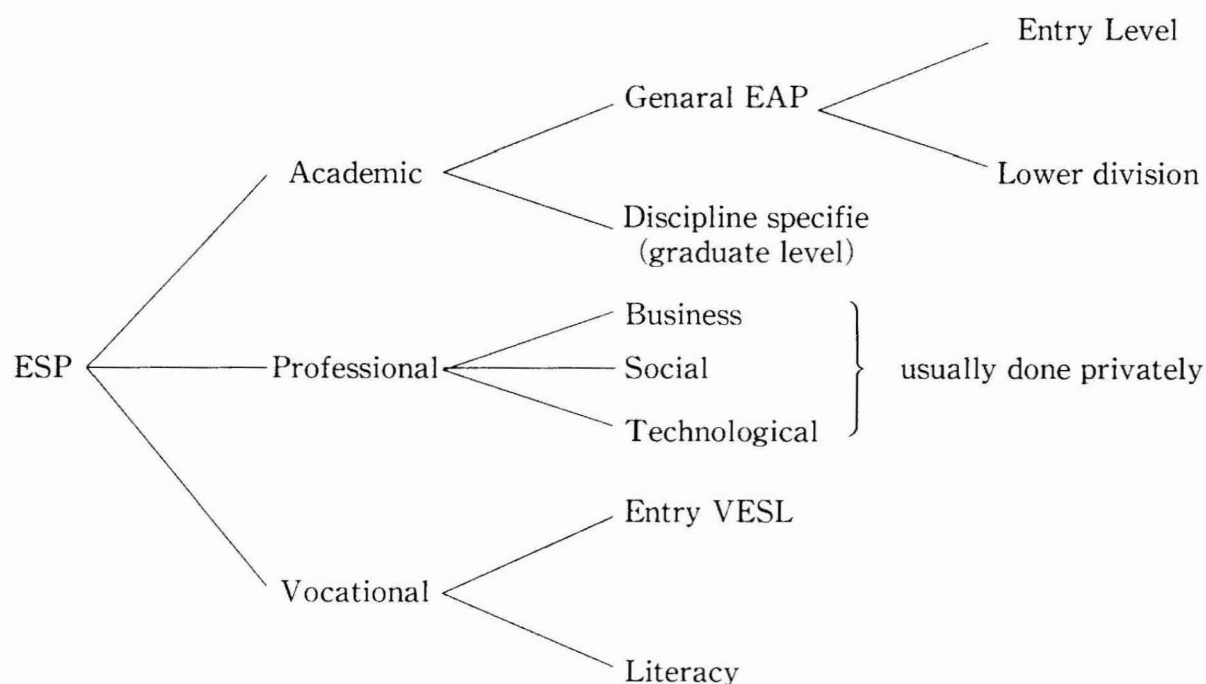


FIGURE 2 ESP in the USA (Source: Johns (17)).

すなわち、米国についてはGeneral Englishについて二つの見方が提示されている。

これに対するDr. Kenmanの返事は次の通りである。

I'm not aware of *general English* having any rigorous linguistic significance. I use it to mean the type or the component of English used in all general senses, i.e. not technical, liturgical, legal, criminal, etc. That is, not the part of English that would be considered jargon by outsiders. Robinson's contrasting General EAP with a 'discipline specific' English seems to go along with my understanding of the term.

I guess, further, that general English would be standard English in some sense, although not necessarily educated. A ten-year-old growing up in New York would speak general English, assuming that he's not ghettoized in a minority area bereft of general English speakers. I also speak general English. I hope this discussion helps.

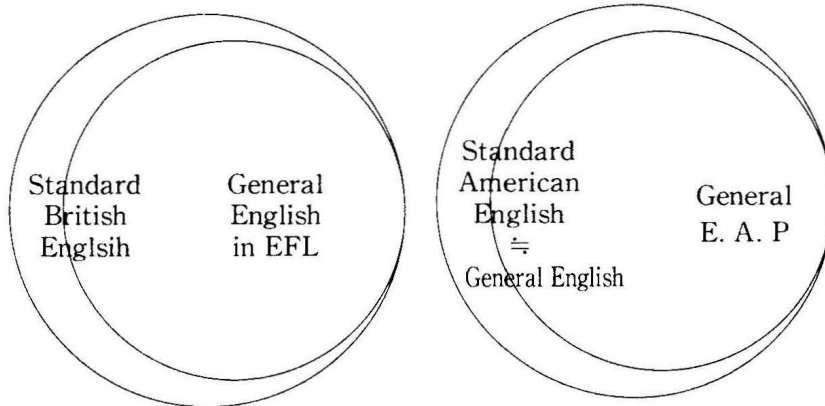
Incidentally, an *intensive* language course - Japanese, English, or any other - is one that meets a minimum of fifteen hours per week. The intensive English course at Thunderbird meets twenty hours per week during the fall and spring semesters, and thirty hours in the summer.

GEについては厳密な捉え方はしておらず、日本での一般英語的な理解である。General EAPについては、逆に米国式の幅のある見方の例証として受け留めている。

いずれにせよ、米国では英国ほどGEを厳格な区分(例、外国人教育専用の英語)をしていないとの例証になろう。

以上の結果から、次の図を描いてみた。これは新発見(?)あるいは再発見になりそうであるが、さらに確認の要があろう。

図5 英米でのGEの捉え方の相違



- (注) 1. 英では、General Englishは外国人向けのGeneral English in EFL (English as a Foreign Language)を意味する。
 2. 米では、General EnglishはStandard Englishとほぼ同義語であり、場合によっては、外国人向けのGeneral E.A.P. (English for Academic Purposes)を指すこともある。

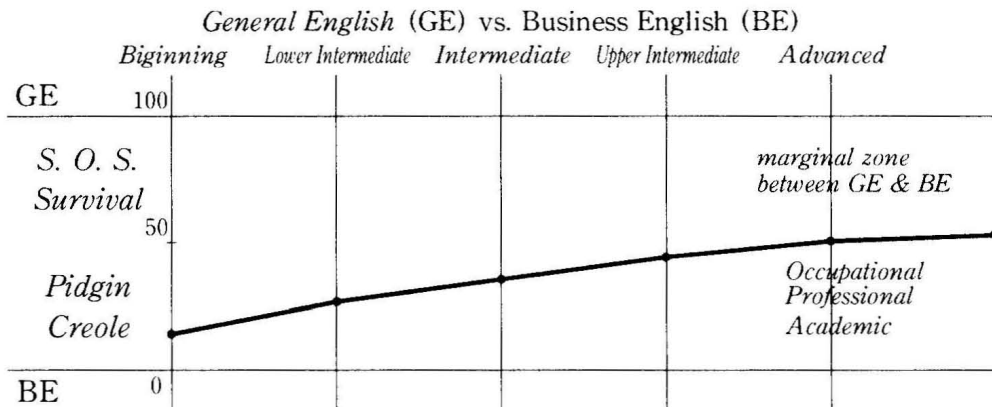
おわりに

この研究を始めた当初、筆者はGEとBEの境界域について、次のような仮想図を描いてみた。

図6 GEとBEの境界域

EPS (*English for Specific Purposes*)

○具体的な ×特殊な



July 12, 1996
 Mitsunori HASHIMOTO

これは、図4のようにGEとSEの境界域を単に量的に理解するだけでなく、GEレベルの進捗度合とSEとの相関関係を量的に捉えようと試みたものである。

〔参考〕

英国のテキスト Penguin Readers では英語レベルと使用単語数の関係を次のように捉えている。

- 1 Beginner (300 words)
- 2 Elementary (500 words)
- 3 Pre-Intermediate (1050 words)
- 4 Intermediate (1650 words)
- 5 Upper Intermediate (2300 words)
- 6 Advanced (3000 words)

今後の課題としては、General Englishの更なる究明、General EnglishとBusiness Englishの境界域についての具体的事実の積み上げを考えたい。特に、単語のみならず語義 (semantic value) の相違に着目すべきであろう。

(はしもと・みつのり/経営学部助教授)

主要参考文献

- (1) Jack C. Richards, John Platt, Heidi Platt, *Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics*, Second Edition, 1992
- (2) C. J. Brumfit, ed., *General English Syllabus Design*, Pergamon Press, Oxford, 1984.
- (3) David Whitehead & Geoffrey Whitehead, *English for Business*, Butterworth - Heinemann, Oxford, 1993.
- (4) Raymond V. Leisker, John D. Pettit, Jr., Nancy S. Darsey, *Business Communication: Theory and Application*, Seventh Edition, Dame Publishing, Houston, 1993.
- (5) Mark Ellis and Christine Johnson, *Teaching Business English*, Oxford University Press, 1994.
- (6) 田崎清忠編『現代英語教授法総覧』大修館書店、1995年。
- (7) Paulin Robinson, *ESP(English for Specific Purposes)*, Pergamon Institute of English (Oxford), 1980.
- (8) Tom Hutchinson and Alan Walters, *English for Specific Purposes - A learn-*

ing centred approach, *New Direction in Language Teaching*, Cambridge University Press, 1987.

- (9) Louis Trimble, *English for Science and Technology: A discourse approach*, Cambridge University Press, 1985.
- (10) Paulin Robinson, *ESP Today: A Practitioner's Guide*, Prentice Hall, 1991.

注

- 1) 橋本光憲「General English 再考－海外英語研修の側面からの考察－」、『神奈川大学言語研究』第18号、神奈川大学言語研究センター、1997年3月。
- 2) 同上「Business English からSpecial Englishへ－金融英語のESP教育について」『研究年報』第51号（1991）、日本商業英語学会、1992年。
- 3) 秋山武清「商業英語学は無力か」『研究年報』第53号（1993）、日本商業英語学会、1994年。
- 4) 同上「ビジネス・コミュニケーション論のフレームワーク」青山経営論集第29巻第3号、1994年11月。
- 5) BEの独自領域の研究（橋本関連分）
 - A. Business English 関係
 - ① 橋本著『最新英文ビジネス・ライティング』中央経済社、1990年。
 - ② 橋本監修『国際ビジネス通信マニュアル』中央経済社、1994年。
 - ③ 橋本編『経済英語英和活用辞典』(*A Dictionary of English Usage for Business and Finance*)、日本経済新聞社、1991年。
 - ④ 橋本共論『英文ビジネスレター文例大辞典』(*A Dictionary of English Business Letter Expressions*) 日本経済新聞社、1995年。
 - B. ファイナンス関係（ここではファイナンスをSEとして独立させず、BEの1分野としてとらえた形になる。）
 - ① 橋本編著『話せる書ける銀行英語』経済法令研究会、1996年。
 - ② 橋本著『金融英語の常識』中央経済社、1997年。
 - ③ 橋本共編『英和金融用語辞典』ジャパントイムズ、1995年。
- 6) 橋内武「English for Specific Purposes (ESP)」田崎清忠編『現代英語教授法総覧』大修館書店、1995年、pp. 233～245。
- 7) Department of Education, *English in the National Curriculum*, London: HMSO, 1995.
- 8) 高千穂安長「General Englishの教授法－ハーバード大学公開講座の事例－

- 9) J. Harold Janis, *Modern Business Language & Usage in Dictionary Form*, Doubleday, 1984.
- 10) 橋本光憲「ビジネス用語の一考察ービジネスとファイナンスの英語ー」『国際経営論集』No.11、神奈川県大学経営学部、1997年2月。
- 11) 秋山武清「商業英語の研究と教育」『実用英語ジャーナル』第16回第1号、日本実用英語学会、1995.9.23。
橋本光憲「戦後における実用英語辞典の発展ーユーザーとして製作者としてー」『国際経営論集』No.10、神奈川県大学経営部、1996年2月。
- 12) 秋山武清「商業英語学の概念」『青山経営論集』第27巻第3号、1992年12月2日。
- 13) 中村巳喜人『ビジネス・コミュニケーション論』同文館、1978年。
- 14) 則定隆男「個別的研究の統合化によるビジネス・コミュニケーション学の体系化」『商学論究』関西学院大学商学研究会、1996年1月。
- 15) 戸川年雄「商業英語方法論管見」1956年研究発表、『日本商業英語学会会報復刻版』日本商業英語学会、1990年。
- 16) 宇都宮巖「EVERYDAY ENGLISH AND BUSINESS ENGLISH」1958年研究発表、『研究年報』日本商業英語学会、1959年。
- 17) 金徳多恵子「英語教育におけるESPとその重要性」『実用英語の世界』南雲堂、1993年。